

# トライアングレート法を用いた地域連携実習の効果に関する研究 (2)

## — 2年次実習の成果について —

(理科教育講座)	山 崎 哲 司
(国語教育講座)	東 賢 司
(学校教育講座)	白 松 賢 博
(保健体育講座)	日 野 克 博
(学校教育講座)	二 宮 衆 一

### “Triangulation Analysis”: The Effects of Community Based Student-Teacher Training Practice (*Chiikirenkei-jisshu*) (2)

— Results of Teacher Training Practice for Second Grade Students —

Tetsuji YAMASAKI, Kenji HIGASHI, Satoshi SHIRAMATSU,  
Katsuhiko HINO and Shuichi NINOMIYA

(平成20年6月11日受理)

#### I. はじめに

愛媛大学では平成18年度入学生から、新しい教員養成カリキュラムを適用して実施している。平成18年度には、初等教科の導入科目として「初等教科概論」を実施し、そのカリキュラムにおける意義等については平成18年度の日本教育大学協会の研究集会などで報告をした(山崎ほか, 2007)。平成19年度には、「教育実習」につながる目的の2つの実習科目を実施した。

教員の養成と免許制度の在り方については、平成18年7月の中央教育審議会答申中に、さまざまな提言がなされており、「教育実習」についても“いわゆる母校実習については、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”との母校実習原則廃止を含め、「教育実習」の課題とそれを改善するために取り組むべき方策を、幾つもの観点から述べている。

「教育実習」は教員養成カリキュラムの中核を成すものであり、「教育実習」までの取組内容は、カリキュラム全体の質に関わってくるものである。昨年度に本学部で開始した2つの新規実習科目の実施結果をふり返り、得られた成果を整理することで、これらの実習が教員養成の改善に果たす効果について推察し、今後の取組を考

える。

#### II. 新規実習科目の概要

2年次の実習科目は、1つは「教育実践体験実習」であり、もう1つは「プレ教育実習」である。ただし後者は授業科目として存在しておらず、「実践省察研究Ⅰ」という省察科目に含まれるものである。また、前者については、実習の特徴から「ふるさと実習」と呼び習わしているものである(以下、この名称を用いる)。

「ふるさと実習」：この実習については平成19年度日本教育大学協会研究集会でも概要を説明したが(山崎ほか, 2007)、原則として各学生の出身校(小学校または中学校、と学校種を限定)で、9月上旬に1週間の実習をするものである。2年次段階で(カリキュラム改革として)「教育実習」を実施している大学も僅かに存在するが、筆者らは本格的な「教育実習」は無理と考え、教育実習を補完する実習として、“教員のさまざまな職務を観察し、教職に対する理解を深めること”(ジョブ・シャドウの意味を持つ)を目的として、この実習を設定した。

実習校を学生の出身校とした理由は、出身県での教員を目指す学生が多いことから、出身校での実習経験は、

表1 実習科目群の配置と目的

4年次	応用実習	公立校	教科指導力、生徒指導力等の向上
	教育実習Ⅲ（選択・他校種）	附属校園	学校種間の接続を考えるための実習
3年次	教育実習Ⅰ，Ⅱ（必修）	附属校園	教科指導力、生徒指導力を主体とし、学級経営や生活指導も含めて、それまでの学びを総括する機会
2年次	プレ教育実習	附属校園	教育実習への動機づけ、自己学習課題の明確化、教科指導・授業の展開法について考える機会
	教育実践体験実習（ふるさと実習）	出身校等	学校現場全般（学級経営、学校と地域の連携、教科指導以外の教師の仕事など）の観察、子どもの理解、授業の展開法・支援法の観察
1年次	観察実習	附属校園	授業や子どもの活動の観察を通じた児童・生徒の理解（初年次科目として必修）

その地域や学校における教育目標や育てたい児童・生徒像を知る良い機会となると考えたためである。また最近の教員に対する社会からの厳しい評価の中で、少なからぬ学生が、“教員は多忙であるにもかかわらず、社会から厳しい評価を受けるだけの、報われることが少ない職業”という意識を持つようになっており、教員という職業への意欲が乏しくなっていると感じられることも、出身校で実習を行う理由である。というも、学生の多くが、教員を志望した動機として過去の恩師の存在をあげるためである。恩師のいる「ふるさと」で実習を行うことで、教員を志望した原点を振り返り、教員という職業の魅力を見ることができよう。

「プレ教育実習」：授業科目「実践省察研究Ⅰ」の一部であり、大学の授業として省察をするために行う、“観察実習”である。具体的には、附属校園で3回生が行う「教育実習」の観察であり、実習のまとめとして実施する研究授業（5回行われるうちの3回）を観察し、その後の協議会へ参加をするのが、「プレ教育実習」である。そのプレ教育実習の経験を、教科内容の理解、教材の工夫、授業の構成、板書や発問等の授業技術、などの観点から大学でふりかえり（省察授業）、次年度の教育実習にむけた意識の高揚と今後の取り組みに対する課題を明確にする、というのが「実践省察研究Ⅰ」の授業部分である。

### Ⅲ. 実習の実施状況

#### (1) 「ふるさと実習」

1月に説明会を行い、参加の申し込みをさせた。最終

的に申し込んだのは80名（学校教育群：64名、生涯学習群：16名）であった。この実習を考えた当初は、愛媛県内出身者は出身校で、愛媛県外の出身者は松山市内の学校でお願いをする、ということ想定していた。これは、愛媛県内については愛媛県教育委員会との連携で可能であろうが、他県は難しいと思っていたためである。しかし実際に各学生に交渉をさせてみると、愛媛県外についても、ほとんどの学校で受け入れていただくことができた。

委員会としても、「ふるさと実習の手引」（実習カリキュラム委員会作成）などを、学生の希望校へ事前に郵送するなどの作業を行ったが、平成9年度に当時の文部省が始めた「フレンドシップ事業」などにより、大学生が「教育実習」以外で学校現場へ訪れることが、ある程度日常的な風景となってきたことが、こうした結果につながっているのではないかとと思われる。松山市周辺を中心として、「地域連携実習」が広く知られてきているが、大学が地域社会と徐々に結びつきを強めていることが、学生教育の変化に大きな影響を与えていると思われる。

ともかく、平成19年度のふるさと実習受入校は、松山市教育委員会に調整していただいた学校も合わせて、合計59校であった。そのうち、松山市内の学校が19校、愛媛県内（松山市を除く）が17校、そして愛媛県外が23校（広島 12、徳島・島根 各2、高知・香川・岡山・鳥取・熊本・宮崎・和歌山 各1）であった。

ほとんどが9月の第1週または2週に実習を行った。松山市周辺は実習カリキュラム委員を中心に、それ以外については主に「ふるさと実習」担当で訪問を行い、

総計41校を訪問した。訪問先では元気に実習を行っている学生の姿を見て言葉を交わし、また校長先生や実習担当の先生方にお話を伺った。実習先の声を簡単にまとめると、

○実習生の活動および「ふるさと実習」に対して、全般に好意的で、“学生もよく頑張っている、いい経験をしている、学校に若さを注いでくれている、このような実習経験をもつことができ、今の学生は恵まれている、今後も積極的に受け入れる”などの感想・意見が聞かれた。

○実習期間については、「1週間では短い」という意見が幾つかあったが（2週間の活動を取り決めた学校もある）一方で、「これくらいが限度」とする意見もあった。

○実習時期については、おおむね妥当という意見であったが、「運動会練習に明け暮れる現在が適切かどうか（ただし、若い学生に積極的に活躍してもらうには、この時期はいいのかもしれない）」という意見もあった。

実習内容は、こちらの意図通りに、教師の多様な職務を経験する機会となっており、数校では非常に細かなスケジュールを作成して対応されていた。また、学生の専門性を活用している（クラブ活動、小学校の英語など）ものも少なからず見られた。

なお、「ふるさと実習」で学生が行った個々の活動については、「ふるさと実習報告書」（実習カリキュラム委員会作成、2008）にまとめ、各学校等へ送付した。

## （2）「プレ教育実習」

先述の「ふるさと実習」は教師の姿全般を見る、ということが狙いであり、また教職科目（教科教育法を含む）の履修半ば、という時点での実習であるため、授業補助などの形で参加させていただくことを要望はしたが、“教壇実習（研究授業）の必要はない”という方針で実習の依頼をした。それを補うものが、この「プレ教育実習：実践省察研究Ⅰ」である。

取得可能な免許種の関係上、この科目については学校教育群の学生に限定せざるを得なかったが、履修者数は100名に達し、対象学生のうち約8割がこの授業に参加したことになる。研究授業は、以下の4日間の6つの時間帯で行われ、その中から3つを選択する。

- 9月19日 附属小学校 同学年組研（1）、（2）  
生活、道徳、算数、体育、理科、国語； 特活、国語、総合、社会、算数、家庭
- 9月21日 附属幼稚園 5歳児の保育参観
- 9月26日 附属中学校 教科別研究会  
国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術、家庭、英語
- 9月27日 附属小学校 異学年組研（1）、（2）  
算数、生活、国語； 音楽、図画工作、社会  
実習を行っている学生、実習生を指導する附属校教員と学部教員、そしてプレ教育実習として参加する2回生が、実習を行う教室に入るため、プレ教育実習でどの授業に参加するかについては、各人の希望を取った後で人数調整を行った。学校教育実践コースの学生については、専修の教科について中学校の授業に参加することを基本とし、一方で3回ともが同じ教科、という極端な偏りは避けるようにして人数調整を、実習カリキュラム委員で行った。

プレ教育実習時に、研究協議会で指導助言を行った教員が、10月の初めに行う省察授業を担当した。日程としては、10月1日 附属小学校同学年組研の省察授業、10月2日 附属小学校異学年組研の省察授業、10月3日 附属中学校教科別授業研、附属幼稚園保育観察の省察授業、であり、それぞれ90分の授業として行った。そして10月4日には、実習カリキュラム委員会で全体の事後指導を行った。

## Ⅳ. 実習の成果

### （1）「ふるさと実習」

#### A 学生の意見・感想から

- 実習後に学生から提出のあった「省察レポート」から、代表的な声を拾い出すと、
  - 先生方も多忙の中、アドバイスや励ましを下さいました。このような時期に実習させて頂いたことにも大変感謝しています。これらの経験を大切に、これからも頑張っていきたいです。
  - この実習でたくさんのことを学びました。子どもたちからもらったこともたくさんあります。実習担当の先生の学級経営の仕方はとても上手なのでまねしたいと思いました。本当によかったです。

- 生徒よりもずっと立ちっぱなしの先生方もピンピンしていた。毎日がこんなものだから、と笑っていた学年主任の先生を見てすごいな、と思った。教師は何より体力がいる仕事だとこの一週間で身をもって学んだ。
- この1週間で生徒たちとふれあうことで、関係を築く難しさ、喜びを感じました。また、生徒たちから学ぶことも多くあったように思います。
- 今回の活動を通して、運動会に対する先生としての見方も知ることができました。行事運営の難しさ、大変さを知りましたが、やはりその中に充実感ややりがいがあるのだと思います。
- どのクラスにも先生と子どもたちの深い愛情が伝わり、やはり教師の職はいいな、と思いました。

○11月に実施した事後指導（体験発表会を兼ねる）で見られた感想

- 実習校には、地域の方々の力が大きく影響していた
- 学校と地域が協力して教育することの大切さ
- 教師は、教科指導以外の仕事がたくさんあること
- 仕事量の多さからくる「時間との戦い」、体力勝負
- 教師も常に学ぶ姿勢を持っていること

## B 実習校からの評価等

この実習の成績評価については、

ア. 実習校の実習担当教諭の評価（「評価表」を、事前に実習受け入れ校へ送付）に基づき、実習状況を実習カリキュラム委員会で評価する。

イ. 学生生活担当教員が、「教育実践体験実習（ふるさと実習）日誌」を点検し、評価する。

ウ. 実習修了後に提出する「省察レポート」を実習カリキュラム委員会で評価する。

以上を総合し、評価をした。割合としては、ア：5割、イ：2割、ウ：3割である。実習の「評価表」については、附属校園で行う「教育実習」の評価方法を参考にし、「ふるさと実習」の狙いに対応する項目を選び出して作成した。評価項目と評価の観点は、以下の通りである。

### ①出席・提出物など

- 欠勤、遅刻、早退はないか。
- 実習日誌を毎日記述、提出しているか。
- 体調管理には留意しているか。

### ②勤務態度

- 教師としての態度・服装・あいさつ・言葉遣いなどが適切で、真摯に学習に臨んでいるか。
- 教諭に対する礼節や協調性があるか。
- 報告、連絡、相談等全般的な事務処理が適切にできているか。

### ③教育活動の観察と理解

- 授業参観の態度が意欲的であるか。
- 実習日誌のまとめ方について、解釈、評価、問題点などの考察が適切に行われているか。
- 課題意識をもって授業に臨み、観察の深化が見られるか。

### ④子どもへの接し方

- 児童、生徒の中に身を置き、積極的に関わることができていたか。
- 学級活動において、学級経営の方針に従い担任と一緒に意欲的に関わることができたか。
- 学校行事、クラブ、委員会活動等において、児童生徒と協力して活動することができたか。

### ⑤授業や活動の補助

- 教師が行った授業の記録を丁寧に取っているか。
- 教師の指導のねらいや方法を的確にとらえているか。
- 教師の発問や生徒の反応に着目し、前向きに授業観察を行っているか。
- 児童、生徒に場面に応じた適切な支援ができていたか。

以上の5項目について、5段階評価（5－特によい、4－よい、3－普通、2－努力を有する、1－不合格）で評価を付けていただいた。評価の素点を50点満点として換算したものが図1である。平均点は8割（平均点42.6点）を超しており、この点数からは、2年次前期終了までに教員志望者に身につけて欲しい能力が備わっている、と判断できるであろうただし、個々の学生の評価について見ると、60%から100%までと総点にかなり大きな差が存在していた。これを実習日誌の記入状況や実習担当者からのコメントと照らし合わせて確認したが、評点の差が必ずしも活動内容に直結しているとは思われない状況であった。「教育実習」でも実習校による評価の差、がしばしば問題になるが、今回の場合も1つにはそのような要因があったと思われる。ただし、「特によ

い」という表現が問題であったとも思われる。何を持ってして“特に”とするのか、判断が大きく分かれたのではないかと思われた。また、2年次の学生に対して、どのようなレベルを求めるか、ということも点数差につながったと思われる。これは、その時期に母校で4回生次に行う「教育実習生」がいた場合に、概して評価が低めになっていたことから推測される。4回生と同様の視点で評価をすれば、2回生にとっては厳しい評価になりがちである。本来は、2回生に対する評価基準を、大学として示すべきなのであろう。

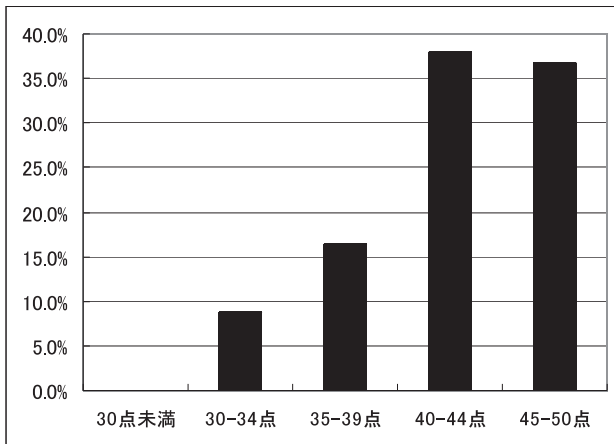


図1 「ふるさと実習」評価分布

次に、各評価項目ごとの評価分布を、図2に示す。ほぼ3以上の点数となっており、大半が4以上の評価である。「出席・提出物など」と「勤務態度」の項目については、“特によい”の評価が多く、他の3項目は“よい”とするものが多い。この実習が選択制であること、また「地域連携実習」などの学校現場体験経験者を参加の基本条件としていることから、生活習慣や態度に関する2

つの観点については、現状のカリキュラムや大学生活の中で適切な指導を行っていけば、2年次の前期までにはほぼ身につけているものと考えられる。一方で、子どもへの関わりや授業の補助など、教師になるために大学で学び、経験を積んで行くものについては、当然のことながら評価が低くなる。2回生前期までの時点であるため、これは当然のことであるが、この点を踏まえて学部のカリキュラムとして何を考えるか、そして到達目標をどのように設定するかが大事であり、また学生が、受入校の評価に対応した課題を持って、次の段階へ進むことができるかが重要である。平成20年度の「ふるさと実習」に関しては、実習の目標を問い、また実習終了後に目標の達成度に関する自己評価等の調査を行う予定である。

(2)「プレ教育実習（実践省察研究Ⅰ）」

プレ教育実習と、それに引き続いて行われる省察授業を含めて、1単位の「実践省察研究Ⅰ」という授業科目になる。「実践省察研究Ⅰ」の最後に実施した事後指導の際に実施したアンケート結果から、この実習・省察授業をふり返る。

A 学生の意見・感想から

自由記述として集めたものから代表的な意見等を拾い出すと、

- 今回の実習に参加して、教育実習の雰囲気や厳しさに触れることができ、来年へ向けたイメージ、自己課題を確立することができました。
- ふるさと実習、プレ教育実習に参加して、普段からの子どもとの関係作りはとても大切だと思いました。これから大学や地域連携実習で学びを深め、来年、自信を持って取り組めるようにしたいと思いました。

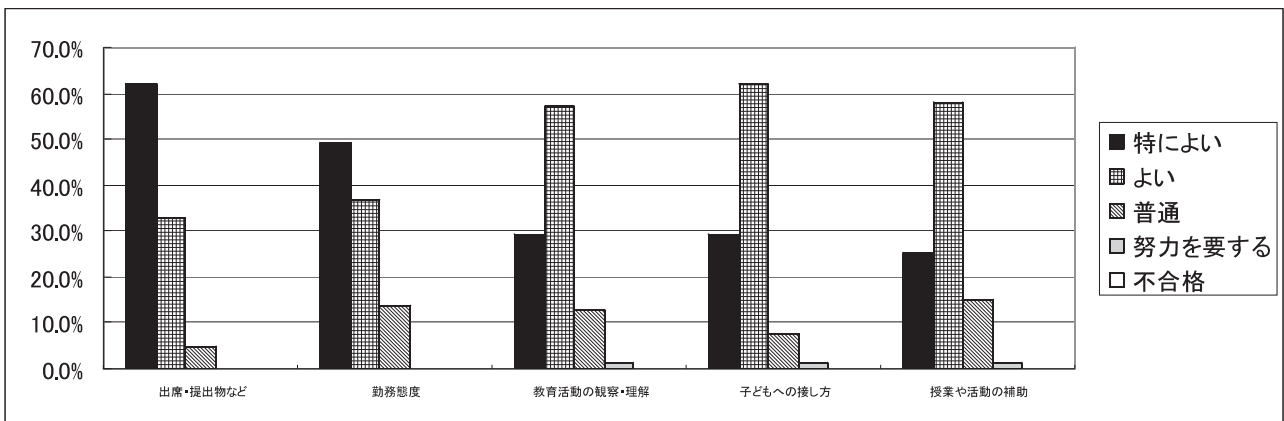


図2 「ふるさと実習」評価項目ごとの評価分布

- 教育実習では教材研究をしっかりと行い、児童の立場に立って授業を組み立てたいと思います。そのために、大学での講義を大切に、また地域連携実習で多くの児童と関わっていこうと思います。
- 実習に参加して思ったことが、自分の世界を広げられないといけないということです。それはいろいろな知識や技能を増やすことや、他人の意見に触れて取り入れることなどです。
- プレ教育実習に参加したことで、教育実習を身近に現実的に意識することができるようになった。来年度への意識や意欲を高める上でとてもよい機会であったと思う。
- 省察研究の授業で話し合いの場が度々設けられており、他の人の意見を聞いて参考になったと思う反面、自分はあまり発言できなかったのが残念だった。その原因は、省察できるほどの知識や経験がないというところにある。今後はこの自己課題を克服すべく努力していきたい。
- 今回の実習や省察の中で、普段の大学生活の中で学んでいることがどれだけ大切か、また自ら主体的に学んでいくことが大切なのかということに改めて強く意識することができました。

#### B 授業に対するアンケートから

プレ教育実習および「実践省察研究Ⅰ」の受講について、3つの問いを行い集計した(図3)。回答があったのは96名、回答は5段階で、5—とてもあてはまる、4—少しあてはまる、3—どちらともいえない、2—あまりあてはまらない、1—全くあてはまらない、からの選択である。

Q1 これまでの大学の学びと結びつけて考察できた

Q2 次年度の教育実習に対する意識を高められた

Q3 今後の大学での学びの課題を持つことができた

2年次前期終了時について言えば、「教職に関する科目」および「教科に関する科目」について、免許法に定められている範囲で半数に少し満たない程度の開講状況である。この段階で考えると、「大学での学びと結びつけて考察できた」に関する評価も、十分に高いものと言える。「地域連携実習」や「ふるさと実習」の経験も含めて“大学での学びと結びつけて考察できた”との回答もあり、さまざまな体験や理論が結びつきながら学習が

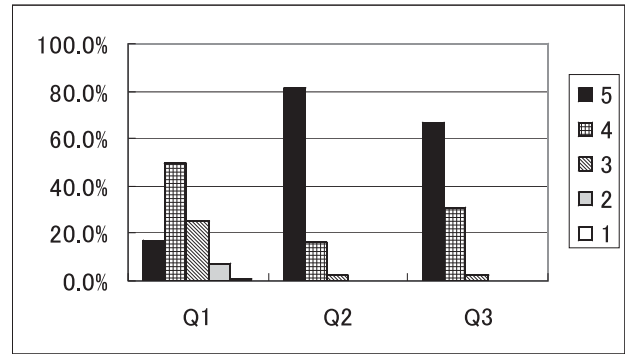


図3 実践省察研究Ⅰアンケート結果

行われていることを示すデータとなっている。また、Q3の高い評価から、体験とその省察（プレ教育実習と実践省察研究Ⅰ）が、理論やその後の実践の意欲を高めていることが示されている。

#### V. 終わりに

平成19年度の小学校教育実習（4週）が終了した際に、小学校4週の実習を選択した平成17年度入学生に対して、アンケートを実施している。それは、教育実習で身につけた能力について問うもので、5段階で自己評価をしてもらった。その結果を簡単に紹介すると、Q1 子どもへの理解を深めた、Q2 教師という職業への理解を深めた、Q3 教師という職業のやりがいを知った、Q4 教科指導力を向上させた、Q5 生徒指導力を向上させた、Q6 大学での学習を生かして、教育実習に取り組めた、である。細かなデータは省略するが、5点満点として平均点を算出すると、Q1：4.8点、Q2：4.7点、Q3：4.8点であるのに対し、Q4：4.0点、Q5：3.9点、Q6：4.0点、とQ1～Q3とQ4～Q6では、自己評価に大きな差が認められた。

「ふるさと実習」などを設けた新カリキュラムは、平成18年度入学生から適用している。「教育実習」ではQ4とQ5に関する能力を身につけてもらいたいが、現状はその段階に到達する前に実習期間が終わっているように思われる。新カリキュラムを適用している学生には、Q1～Q3の問いに関しては、「ふるさと実習」や「地域連携実習」で獲得済みとなってもらいたいものであり、「ふるさと実習」後の感想等からは、その目的がおおよそ達成できているのではないかと思われる。

Q6に関しては、学部のカリキュラムに関わる問題で

ある。平成17年度以前の入学生からは、「大学のカリキュラムを、もっと実践的なものにして欲しい」という声をしばしば耳にしてきた。一方で、平成16年度入学生や17年度入学生から、「ふるさと実習」を私も受けたかった、「プレ教育実習」は良いと思います”などの感想が聞かれる。カリキュラムが変化していることを強く感じているのは、新カリキュラムに変わる直前の学生たちではないかと思われる。実習からの学びを大学の学習と結びつけながら深めてゆくという意識を、「プレ教育実習」とその省察を通して（図3に示されるように）明確に持ち、「地域連携実習」や「教育実践演習Ⅰ」なども含めて、“理論と体験の往還”による学習の習慣を付けてもらいたいと思っている。

2年次実習の「教育実習」におよぼす効果については、平成20年度以降の「教育実習」を通じて判断されるものであるが、アンケート等の結果から、各実習の目的はある程度達成できているものと思われる。新カリキュラムと旧カリキュラムの学生が「教育実習」前後でどのような違いが見られるか、検証を行いながら、2年次実習の効果を確かめ、カリキュラムの体系化を更に進めたい。

なお本研究は、文部科学省科学研究費補助金（萌芽研究）の助成を受けた研究成果の一部を報告するものである。

## 文献等

- 愛媛大学教育学部実習カリキュラム委員会編，2007，「教育実践体験実習（ふるさと実習）」の手引，16p.
- 愛媛大学教育学部実習カリキュラム委員会編，2008，平成19年度教育実践体験実習（ふるさと実習）報告書，96p.
- 山崎哲司・白松 賢・日野克博・東 賢司，2007，教師力の基礎を養う「教育実践体験実習（ふるさと実習）」，平成19年度日本教育大学協会研究集会発表概要集，p.14-15.
- 山崎哲司・白松 賢・日野克博・中西 淳，2007，実践力向上を目指したカリキュラムの始動ーカリキュラムの体系化と「初等教科概論」一，「日本教育大学協会研究年報」第25集，日本教育大学協会第二常置委員会編，p.111-122.
- 参考 URL：

中央教育審議会 今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）－文部科学省，[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm)

